

座談会で、なおキメの細かい討論に追込めなかったのは、司会の不行届き、非才による。お許し願いたい。大腸に関しては、癌研のすばらしい集積と業績は別にして、日本の一般では、胃に比べタッチがかなり遅れていた気配がある。したがって、大腸だ、大腸だという掛声が、ここ2～3年の間に、あちこちでやかれた。あせりとやるせなさであった。また胃と比較して、という格差感であった。そのため業績ならぬ臨床統計、臨床経験が相次いでみられることにもなった。

臨床外科28巻1号、臨床成人病3巻2号、それに本誌、こうなると、まさにオンパレードである。読者は、それらをつきあわせて、その内容を熟思あらんことを。

今までの診断は、なんと古典的なタッチであったことか。何かと理由をつけては、X線診断に手を抜いてきた。それが、最高の診断だと過信している人が、まだいかに多いことか。遮二無二内視鏡に走ったいきさつがある。平穩の攪乱者のような立場だけを内視鏡がとる。それも、何と過保護をうけ、それに甘んじていることか。浮気な収集家の域をでないのでは困る。臨床で合理的な位置づけが必要である。

いま、早期胃癌の面々が、大腸になだれこんだところである。今までのいわゆる大腸屋さんとの出会いは、すで

に始まっている。どんな展開が起こるか楽しみである。B.C. Morson 編者の Diseases of the Colon, Rectum and Anus 1969. B.C. Morson と I.M.P. Dawson の共著の Gastrointestinal Pathology 1972 がいまうけている。何と Morson 旋風に吹きまわられていることか。日本では、臭いものには蓋をして、という状態が長く続きすぎたようだ。

当代一流の売れっ子の役者も、前記の特集号の嵐がすぎたあとには、もうこれ以上の話題も種もなくなったようだし、どうゆさぶっても演技のしようもないようである。

今からはじっくり腰をすえてやった仕事のでてくる番であろう。国内初演の時期は終った。Morson 学説もよし、厚生省が難病だといって難病対策でかたづけけるのもよし、いろいろとニュー・ファッションがでてきてにぎやかな対話に話がはずむであろう。

しかし、一方には、大腸癌については、5年生存率は世界に冠たる成績を残している（梶谷、山田）。見つけたものの話は決っている。

今何を問題にしなければならないのか、これは、おのずからわかることである。